

ば、正義と神に關する峻嚴なるヘブライ的感覚は喪失するであらう。

イエスは新社會の希望を『教養ある自己本位』あるひはこれに類似した快樂主義的哲學に懸けない。これは言ふまでもなきことである。彼は人は自身の幸福を追究する者と假定してゐたやうに見える。彼は決して人道の希望と恐怖とに訴へることに躊躇しなかつた。併し、これは何らかの方法に於て除外例を設けるを必要とし、自然的衝動を哲學化して凡ての社會奉仕を聞きよき利己心の名の下に變質せしむることは、彼の夢想だにせざる所であつた。自己蔑視と自己稱揚とに對して敢然男性的痛撃を加へた點に於てイエスを凌ぐ者はないのである。イエスが豫期した人の活動の動機は個人的素質の改善のそれではなかつた。自己保存は肉體的本質の最後の動機であらうが、それもイエスに従ふ者には適應せられないのである。『己が生命を救はんと思ふ者は、これを失ふのである』(マタイ傳十六ノ二五)。

上述の點を概括すれば、イエスがその理想的社會を生活上の眞の事實とする爲に依倚した諸の力は機械的のものでなく、また利己的のものでもない。彼が認めた如く、社會に活動する凡てのものは、より善き組織に向つて進んでゐた。そのより善き組織は外的推進力あるひは豫定の結果でないことは既にイエスが叙述せし所である。神の國は靈的なものである故、その實現を齎す諸力も亦存在するのである。また、神の國は一大家族である故、それに屬する者は私利を貪る者でなく、兄弟であり、姉妹である。

(二)

イエスがその理想完成の爲に依倚した本質的諸力を更に積極的に叙述せんと企てるならば、人間の本性に關するイエスの根柢的概念に復歸せねばならぬ。イエスは民族の固有の力と能力とを信するのである。彼が表示した理想は相親しんだ人々、また建設せんと望んだ國の基礎となるべき人々の爲めであつて、動物に近き劣等人々の爲

でなかつた。人及び社會が必然に救はるべき性質を備へてゐる故、個人及び社會改造は出來得べきことなのである。救はるべき人類の核心に深く潜むものは亦救ひの諸の要求である。彼は決して形式的にその要求を分類したのでない。實際、彼は要求の全範疇を承認すると言ひ難い。併し彼は諸の範疇を豫想するのである。彼の判断では、それらは道徳的に漠然たるものであるが、なほ各々に附與せられた相對的意義に據れば、健全なる人格、あるひは頹廢的人格を表示するのである。人間の種々なる要求を豫想してイエスは、狂信者の衝動でなく、實際的人間の衝動を指示するのである。純粹の肉體的要求の場合、反禁慾的理想に特に忠實なることを表現して、イエスは子がパンの要求することの合理性を假定し（マタイ傳七ノ九）日用の糧を祈り求むることを弟子らに教へ（マタイ傳六ノ一一）饑餓の爲に意氣消沈せる群衆を見て憐憫の心を有つたのである（マタイ傳十五ノ三二、マルコ傳八ノ三）といへ、肉體的要求は他の多くの要求に比して劣つてゐるのである。人の生くるはパンのみに由らないのである（マタイ傳四ノ四）。彼の場合に見

るやうに、靈的熾烈さは人をして肉體的饑餓を遙に超越せしめるであらう（ヨハネ傳四ノ三一―三四）。彼の弟子らを誘うてパンを買さしめんとするある種のパン屋に警戒せよとイエスが彼らを諭した場合、弟子らが愚鈍にも彼の言を誤解したので、その時彼らに與へた懲戒は最も峻烈なもの、一つである（マタイ傳十六ノ五―一二）。これと同じことが凡ての經濟的要求にも亦眞理なのである。商法に成功せんと焦せる商人の要求の強さ、あるひはより多くの賃銀を望む労働者の慾望をイエスよりも能く了解せし者があらうか（マタイ傳十三ノ四五、二十ノ二以下）。天の父はその子らが食物と著物とを要するのを知り給ふのである（マタイ傳六ノ三一、三二、ヨハネ傳六ノ二七）。人はこのことあるが爲に反つて食物、著物の追求を生活の主要目的としない。人の生命はその所有の豊かなるに因らないのである（ルカ傳十二ノ十五）。

低級なる要求の満足でなく、眞理を追求する更に崇高なる願望と生命のより崇高なる確實なこと、多くの經驗の願望との満足は、生活の新組織に潜流する動機であらね

ばならぬ。人は善人たるべく強ひられてゐない。彼の願望が彼を善に誘導するのである。假りに、かゝる願望が缺けてゐるならば、その缺乏の罪を確信せしめらるべきである。屈從でなく、愛ある衝動は高尚なる生活の鍵鑰である。新社會の市民は僕でなく、友である（ヨハネ傳十五ノ十五）。習慣的義務は、友情が鼓舞して爲さしめるもの、尺度とならないのである（ルカ傳十七ノ十）。

イエスは神を知らんとする願望を人の根柢的願望の主なるものと分類するのである。眞理、あるひは原則として彼を知るのではなく、人格者として知るのである。ピリポの叫び『主よ、父を我らに示し給へ』（ヨハネ傳十四ノ八）は人類の衷心の發露であつた。この願望が享けた應答こそ此の世を満足せしめたのである。歴史の光に照して見れば、彼の生命の主要なる意義はその教訓よりも彼自身に秘められてある。彼は神を啓示する者であつた。彼の同時代の人々は最初は漠然としてゐたが、彼を神の啓示者と認めたとあつた。第二世紀も亦全然同じ觀察を下したのであつた。イエスは神に就ての

より完全なる知識の要求の性質を詳細に叙述せず、反つて、それを願望よりも寧ろ必要として取扱ふてゐるが、それはともかく、この知識は彼の説教と生活とを支配する興提として絶えず現はされてゐる。彼がこの世に來つたのは、人が聖なる生命を豊に得んが爲であつた（ヨハネ傳十ノ一〇）。

人間相互に存在する關係に就ても同じく、イエスは倫理學の心理を分解せず、我らの時代より彼の時代により傷ましくも明白に見受けられたる事實即ち人がその隣人として善き關係を結ぶ爲の標準と動機の必要を教へるのである。この理由の故に、——福音書の最古の資料に據れば——彼は完からんと願ふ富める青年を衷心よりの同情をもつて迎へ（マルコ傳十ノ一七—三一）また神と人とを愛する二重命令に見える鶴式の總和を能く心得てゐた學者をも非常に同情をもつて待遇したのであつた（マルコ傳十二ノ二八—三四）。これらの人々は單なる詐譎をこゝとする者でなく、反つて、より確的なる倫理的標準の憧憬者であつた。また、群衆が暫くの間であるが彼の言に注意を拂つたのも大

體に同じ理由に依るのであつた。彼は裁判官また財産分配者となるを欲しなかつた(ルカ傳十二ノ二三―一五)。けれど、彼は彼の指導を必要とする人々を見た時、社會的義務に就て何らの拘泥を感せず自由に教訓を垂れたのであつた。彼は思慮深からぬ婦人(ルカ傳十ノ三八―四二)、臆病なる子(マタイ傳十八ノ二二、二二)激し過ぎる熱心なる弟子ら(マルコ傳九ノ三八以下)に果してこの要求がありや否やは少しも考慮しなかつたのであつた。

再び問題を繰返す。彼が人々に標榜した義務は生活の標準を提供した。その標準は何らかの方法にて更により合理的社會生活に對する動機を提供したであらうか。人々は神に就ての知識とより善き倫理的標準とを熱望する、尠くともそれらを必要とすることを前提として、イエスは如何にしてこの必要を動機と變せしめんとするか、といふ疑問が生ずる。要するに、彼も亦愛することを命じて、その實行を容易ならしめぬい高尚な人々の一人に過ぎないのであらうか。

再びキリストの人間觀に立ち戻るならば、この必要の二重性の根據を認めるのであ

る。人は合一に於てのみ常軌の生活を知る社會的存在者である。イエスは人の常軌の生活を顯現して、更にその必要を深めたのであつた。既に明かなる如く、生活には二重の社會的關係即ち聖なる子性と人の協愛性が含まれてゐる。これらは個人と社會との建設へ必然に向ふ基督教動機の淵源である。

(三)

人と神との間に存在するであらう、否、儘に存在せねばならぬ關係を表現する爲に、イエスは『父』と『子』といふ名稱を用ひた。彼はこの名稱に依つて何を意味したか。これは再び論議する必要ない。たゞ、これらの名稱が表現する至高の關係が如何にして社會生活の爲に動機を提供するかを熟慮すれば、それにて充分とすべきであらう。イエスが啓示した人間の聖なる子性の可能性は、二つの格段なる點に於て動機の力の淵源となるのである。

凡ての理想の場合と一般、イエスの人格と生活とが啓示した人の生命の可能性は人の模倣心と再現心とに熾烈なる刺戟を與へたのであつた。併し、イエスは決してストアの亞流を汲んだ形式を用ひて彼自身を現さなかつた。ストアの哲人はその自得の徳に依つて内には罪惡を征服し、外には困難に打ち勝つに充分な程強剛の者であつた。これに反して、イエスの生活は祈禱の生活であつた(マタイ傳十四ノ二三、マルコ傳一ノ三五、ルカ傳五ノ十六その他)。また、彼は常に天の父の意志を遂行した(マタイ傳二十六ノ四二、ヨハネ傳六ノ三九、八ノ二九)。彼の生命の深遠さは聖なる者との靈合に依るのである(ヨハネ傳十ノ三十)。彼と父とは一つである。これらの特異點に於て、イエスは彼の生涯の研究者とつて常に靈感の源である。ある人々はイエスの生涯の歴史的記録に就て狐疑しなながらも、彼ら自身の衷に彌増に再現する人格の理想的典型に接せんと熱望してやまないのである。従つて、他の人々が彼の感化を如何様に説明しやうとも、イエス自身の心境に就て言へば、彼とその弟子らの交友より生ずる最高の結果は、弟子らがこの完全

なる生命の分與を享けることであつた。詳言すると、神との靈交の生命を本然的に要求する人々を満足せしむべき生命、即ち人々自身の間、キリストと彼らとの間に、彼の父と彼らとの間に、起る合一の生命を享けることが、イエスとの靈交より生ずる最高の結果であつた(ヨハネ傳十七ノ二二、二三)。

併し、この新しき關係——子性——の諸の結果も亦イエスにとつては根本的なことであつた。彼が遺した模範は原子的自己中心の道德的生命(假にかゝる生命がありとすれば)と異つたものに人々を高揚するに適しいのであつた。それと同じく、新しき子性も亦新しき動機と選擇とを興起せしむるであらう新しき道德的衝動と新しき道德的狀態とを齎すのであつた。換言すればあらたに生るゝことであつた(ヨハネ傳三ノ三、六)。『子を有つ者は生命を有てるなり』(ヨハネ傳五ノ二六)。

比較的古き神學者は異議なく上記の點に就てのイエスの言を了解するに誤らないのであつた。同時に、心理的事實を律法的義視と轉置する傾向を有つてゐた。人の人格

と神の人格との靈的交締の結果である道德的更新説よりもイエスとパウロの教訓の核心に近きものはないのである。即ちこゝに謂ふ更新説とは、二人の友が絶えざる親交に依つて相互の人格上に齎す普通の變遷の徑路を意味するのである。イエスの場合を觀ても、これと異つた象徴的なものと思はれないのである。倫理の教師としてイエスの絶比の意義が彰はれるのは實にこの點である。倫理と宗教とを絶縁せしむるよりも、倫理を宗教の基礎たらしめるよりも、彼は宗教的經驗を善行爲の源泉とするのである。彼はまた彼自身の生活をもつてその哲學の具體的實證とする。彼は神を啓示し、亦人間の生命の可能性を啓示したのであつた。イエスが啓示した聖なる子性の眞理を了解する爲に專斷派中の專斷派に従ふ必要はない。恍惚の極致にある神祕主義者に従ふ必要もない。イエス自身の思想は極めて單純で具體的である。彼は子性に由つて人性と神性との間に在る純眞な同質性を意味したのであつた。この同質性は人道の根本的能力によつて明かにされたものより更に截然たるものである。それは人の心情に及ぼした神

の感化の結果である。かく聖靈の更新力の下に來つた者は最早彼自身を見るのでなく、その新しき理想即ち父の完き相に於ける自身を認めるのである（マタイ傳五ノ四八）。他の形式でもつてこれを表現するならば、新しき家族の性質の表現は、仁慈と慈悲の行爲に預想せらるゝのである（ルカ傳六ノ三六）。屢々、イエスは聖靈に滿されて葡萄の樹がその枝に生命を供給するになぞらへて、道德的衝動をもつ新生命の源として自らを表現するのである（ヨハネ傳十五ノ一）。又、時々、彼の弟子らは彼の父の植ゑ給うた樹木と思惟されてゐる（マタイ傳十五ノ十三）。とはいへ、生命の新しき相は常に高尚なる衝動が發達する地層なのである。氣高き行爲を實行すること（ヨハネ傳十五ノ四）、イエスの命令を遵守すること（同十四ノ一五、十五ノ十）、これらは實に聖なる生命の膠著と移入より生ずる新しく聖なる生活の試金石である。新生命の結果は、かく更新せられたる心情よりの賜物である。パウロの言を藉りて言へば、靈の結ぶ果は愛・喜悅・平和・寛容・仁慈・善良・忠信・柔和・節制である（ガラテヤ書五ノ二二）。それ故、新しき人は完全なる者で

なくとも、完全を期して進歩して行く者である。蓋し、彼は新しき性格の者、故郷へ歸り往く放蕩兒なのである。

(四)

彼の組織の中心思想の自然の歸結として、茲に、イエスの社會進歩の哲學に他の要素即ち兄弟性の意識より生ずる愛を認めるのである。肉親の兄弟は衝動的にかつ自然的に愛し合うのである。新しき協愛團の場合、即ち二人の者と神との間に存在する本質的關係の場合に於ても同様なることが見受けらるゝのである。各人が神の子であるならば、彼らは兄弟でないであらうか。彼らが一度共通性を實現するならば、愛し合はないであられやうか。議論はともかくとして、イエスはこのやうな場合、彼ら相互に働く愛を認めたのであつた。人とその敵人との間に起る愛は、命じらるべき性質のものであるが、兄弟間のものはその趣き自ら異なるのである（マタイ傳五ノ四四）。それは當然預期

せらるべき性質のものである。かゝる協愛的感情を阻害するものは、その何たるを問はず免除せらるべきであつた、たとひ、宗教的戒律嚴守を犠牲に供しても敢行せらるべきであつた。協愛關係が存在してゐる場合、それを尊重することに失敗するならば、その人々は相愛すべしとの命令を受ける必要がある。これは疑ひなき事である（ヨハネ傳十三ノ三四、十五ノ十二）。凡ての律法と一般、これも亦一時的のことに過ぎない。協愛團の團員として相互の關係の實現が親密になれば、人は徐々に義務の觀念より相愛することをせず、衝動より愛するやうに傾いて行くのである。この新しき愛こそ實にイエス自身の愛に等しきものであつた。必要さへあらば如何なる犠牲をも敢て厭はざる底のものであつた。

併し、この點に於て、我らは社會的動機に關係してゐるのである。かく靈感を蒙れる者は最早彼自身の個的即ち極微な自我に籠居するのでなく、彼の社會的即ち協愛的自我の生活をなすのである。イエスは神の愛と新しく聖なる子性の可能性とを啓示し

て、個々の罪人を救ふ道を開いたのみならず、更に多くのことを行つたのであつた。かく、神の愛の意識的回復を許される者は誰れでも、神との場合と同じ關係に於て他の人々に對してその兄弟となるのである。従つて場所、時、門地、社會的地位などを無視して、協愛的行爲の數々が實行となつて顯はれるのである。而して、これらの行爲は仁慈の相互的行爲となり、各人が事へらるゝ爲でなく、事へることを追ひ求める。換言すれば凡ての者の僕となる新社會組織を齎すまで、協愛的行爲は常に繰返さるゝのである（マタイ傳二十ノ二六、二八）。

(五)

兄弟團の了解に就て顯勢力的方面となる新社會の力（人の衷に潜む新しく神聖なる生命の結果である。これは忘れてはならぬ）を更に精密に考察するならば、その中に單なる感情的要素以外のものが含有せられてゐる、感情的のものを同じ程度まで意志

を含んでゐるとイエスは思惟したのであつた。これは明白である。もし、さうでなかつたとすれば、新しき實在感の結果である愛を有つた者が、どうしてまたこの實在の朦朧としてゐる人を愛するやうに期待せらるゝに到つたかを認め難くなるであらう。かくの如き愛は多分イエスの兄弟觀に恰當する兩名の場合には了解し得るであらうが、神の國に屬する一人と然らざる者との間にては不可解なものであらう。これはよく主張せらるゝのである。假にさうだとすれば、如何して進化が起り得るだらうか、あるひは神の國が親しき協力行爲となるに失敗するのであらうか。これらは姑く措き、イエスの教訓の全體に涉つて熟慮せらるゝならば、近親感より生ずる自然的愛は敵人にさへ向けらるゝであらうことが了解されやう。敵人に對してイエスが懐かれたと思はれる慈愛を感じることは恒に容易でないであらう。併し人はその敵人を恰も兄弟であるかのやうに待遇し得るのである。かやうな場合、愛の溢るゝ感情によつて靈感を蒙れる行爲は義務の爲にその道を略叙するのである。愛する者に自然的に爲した同じ仁慈

は今や迫害者にも義務感より實行せらるゝに至るのである。

抑、これらの行爲は何の謂ひであらう。イエスは神の國の民に對して責むる者の爲に祈禱し、これを祝福する外、別に彼らがなすべきことを命じない(マタイ傳五ノ四四)。併し、要するに彼の意味は知るに困難でない。自然的愛と制御を蒙れる愛とは共にイエスの理想的社會を構成する諸條件の完成を追求するのである。環境は自然に種々なる方法と進路とを決定する。併し、兄弟性の感覺より生ずる愛は、社會組織を構成し、協愛性はその組織の下にある社會生活の凡ての相に特徴を與ふるまでは決して満足しないのである。時々かくの如き衝動と義務とは指導を必要とするのである。既に明白なる如く、イエスは廣義の原則に由つて指導を與へた。併し、特殊の場合には、彼はかく啓蒙を享けた人の衷の神聖なる生命が基督教的社會制度を改善し、より多く實現すべく期待せられ得ると確信せしやうに見える(ヨハネ傳十六ノ十二)。

それ故、人々が何を措いてもイエスの言とその生活の感化の下に來つた時と場所に

は、協愛と相反する制度即ち烙印使用、一夫多妻主義、小兒遺棄、奴隸、飲酒、娼制などは社會の表面より消え失せたのである。實際、聖なる同族性の感覺より生ずる場合以外に協愛へ向ふ健全なる進歩は見られなかつたといつても差支へない。今日に至るまで、正義の爲の辯明と奮闘とは革命を齎し、諸制度を破壊した。併し、これらが協愛に基く衝動に依つて補足せられ、また修正せられた場合のみ、平和なる正義の果を結んだのであつた。

(六)

かく、イエスは常に彼自身に何ら矛盾の跡を留めないものである。個人の倫理的再生は社會の完全となるに先立つものと豫想さるゝのである。然し、茲にもイエスは人間の能力に忠實なのである。利己的傾向と全く同一に、宗教は人間生活に於ける原動力の一である。それを無視するのは倫理的衝動の最も力ある源を排除するに等しいので

ある。それ故、イエスが前進運動を効果あらしめた他の多くの力に極めて輕微な程度に依倚したとは奇異の感を懷かすであらうが、それでも彼が人間の本性である宗教的方面とその必然の結果である新しき人間の協愛性の概念が齎す人道に對する熱情とに注意を凝集する點に誤謬ありと主張することは出来ないである。生命は實に物質的快樂を追求するよりも遙に勝つたものである。民族の進路に一時期を劃した過去の人々は、孰れも皆齊しくかく判斷したのであつた。絶えず社會に貢獻してゐる可なり多數の人に就て考察せよ、彼らの衝動はある點に於て神の觀念あるひは協愛の觀念に根ざしてゐなかつた。その爲、果して幾人の者がよく青史にその名をどゞめるであらうか。聖なる子性とそれに伴ふ人の兄弟性とを啓示するに當つて、イエスは社會的進歩を持續する基礎を提供したのであつた。何んとなれば、人類が聖なる神の愛に依つて靈感を享けた一大家族となるならば、世界がこれまで幻影に描いてゐた至高の社會的理想の實現を阻止する力がこの世にも地獄にもその跡をどゞめず消え失せるのである。

第九章 社會更新の道程

聖なる子性とそれに伴ふ人間の兄弟性とは實にイエスの社會教訓の核心である。これこそ彼の多様な教訓に統一を與ふる鍵鑰である。その中に含まれた凡ての道徳力をもつて、彼の王國の發達は基礎を据ゑらるゝのであつた。イエスはかく信じたのであつた。否、更に一步を進めて、新しき神性と人性との關係の啓示に依つて更新せられたる道徳力は、それ自身多くの改造を遂行すると期待せられたのであつた。かく言へばとて過言ではあるまい。これがイエスの立場であるならば、既に論述せしものを除いて、彼は特殊なる改造に就て詳細な指示を與ふること極めて稀れであつた理由が大體説明出来るであらう。彼は更新の過程には無關心であつたか。個人及び社會の場合に基督教活動の結果として生ずる奮闘と發達の詳細に觸れずその一般性を豫示したので

あるか。換言すれば、基督教は人道の更新を試みる凡ての意圖に於てイエスあるひは他の人の指示に従つたかといふのである。

(一)

これまでイエスの教訓を論述して來た點に同意を表するであらう者でも、彼が思惟せし如くに神の國の未來は普遍性あるひは適當なる進歩を保有してゐると信するに躊躇するであらう。僅に少數の異邦人の入國を許容する爲に門戸を開放せるイスラエルと新しき王國とは相似たるものなりとの信念にイエスを制限することは決して稀な意見でないのである。イエスの如き著名ならず、感化力乏しきユダヤ人が普遍的帝國の幻影を懐くといふことは、たとひあり得るとしても、驚異に價ひするのである。併し、何人も未だ嘗てイエスの生涯の後期に言つた言を讀んで、更新の進歩は地理あるひは政治的境界線によつて制限せらるゝものにあらずとイエスが豫想してゐたのを確信し

ない者はない。縱し、イエスは基督教國中に實現した驚嘆すべき變遷を豫知しなかつたとは認しても、彼の言の完き綜合は、この無知識が一時代の終極にまで達する徑路の一般性及び神、正義、愛が至高のものとなる新社會組織の完全なる構成にまで擴大したと説く解釋を認容しないのである。イエスが狭き門と細き路とを見出す者は少なしと宣言したと反對論を唱へるかも知れない、併し、これに對して、かゝる警句は彼の聽衆中の親しき友の範圍に適應されたものであり、彼がこの世の福音化と征服とを豫想した他の言と關聯して考察せらるべきものであると答へるだけで充分である。これと同様、來るべき神の國に關する彼の預言の完成を望む人々のことを言へる言に適當なる價值を認めて（マタイ傳二十四ノ三四）、この國の降臨はユダヤ國の滅亡を絶好の新機會として突發する進路を採り、その窮極の完成は全智の深淵に秘められてあることを記憶せねばならぬ（マタイ傳二十四ノ三六）イエスの思想を最も美しく表現するものとして『大なる訓令』を認めるならば、彼はユダヤ及びガリラヤの福音化と同様、世界の福音化

に心を用ひてゐたことは否定し難い結論である(マタイ傳二十八ノ一九)。彼自身がかゝる廣大なる事業にその心を傾倒してゐたのは慥かと思える。この事實は熟慮せられよく秩序の整へる計畫の一部分として説明さるべきものである。この計畫の中に彼自身の福音的宣傳が少數の敬虔なる徒の養成を根柢として成立してゐること及びこの少數敬虔の徒が彼の精神を體得し、直に新社會の指導者となり、またその核心たるべきことが暗示されてゐる。かくの如き少數の人々の群がその裡に無限に擴大する可能性を秘めてゐると確信するところに閃めくイエスの放膽は、人道に潜む無限の善の可能性を認め、旺んなる樂天主義と全く合致するのである。この兩方面に、新社會組織、發達の哲理が横つてゐるのである。假に、彼の教訓が遙に人道的でなく、人道は亦倫理的更生の可能性に遙に乏しかつたとすれば、彼も亦人々を瞞着し、制度の破壊のみをことゝするやうに常に思惟せらるゝ基督に屬する烏合の衆の一人に過ぎなかつたであらう。

(二)

改造に關する特殊の教訓をイエスに期待する人には失望が甚しいのである。彼はモ―ゼの組織に充滿する特殊の細訓には全然無關心である。貧困と哲學とに就て漸く興味が惹起しつゝあつたが、この點に觸れないとしても既にロマ帝國內には悖德實に怖るべきものがあつた、イエスはこれに對して天より火を呼び迎ふべき筈であつたが、また、發達しつゝある社會の注意を喚起するに足る重大なる問題に就ても教訓を垂るべきであつたが、彼はこれらの一つだに言ひ及んでゐない。福音は既に善き忠告をもつて食傷せる世に更に強ひる道德的教訓の新編輯でなく、正義に向ふべき力であつた。ユダヤ人と異邦人の更生の過程は、律法に對する新しき服従のそれではなく――たとひ未だかつて見ざる程靈感に満ちたものであつたとしても――、進化の過程がその必要を指示する制度を通して顯現する發展の過程であつた。新社會の象徴は神の手によつ

て彫刻せられたとしても、石をもつて象徴せらるべきものでなく、畑に植ゑられ、人の知らざる間に成長し、適當なる時期に苗、穂、遂にその中に充ち足れる穀を生ずる種子をもつて象徴すべきものである（マルコ傳四ノ二六―二八）。

かく、進化といふ言を用ひることは豫想外であるが、イエスは新社會の進歩の一般的法則を進化と認めたのであつた。

それは現在する力を變質せしむることである。とはいへ、このことは、社會生活の完全なる理想の到達に必要な凡てのものは單に神なき社會性の進展であるといふ信念にイエスを結びつけるのでない。既に論述し來れる如くに、イエスは人生の他の能力と同様、眞に常軌に適へる人間的のものとして人の宗教的能力を認識したのであつた。それ故、彼が世の常の生活の如く、あるものに發展すべきものと人道を信賴した場合にも、彼は人性に潜む宗教力を確認してゐたのであつた。此の宗教力は自ら大なる發展の可能性に富み、變質力ある人格力を有つのであつた。新社會が示現する世界、

あるひは現在の社會的環境は、體得せる神に依つて更新せらるゝ素質をその裏に含有する事實に由つて基督教社會關係の概念に誘導さるゝのであつた。イエスは動物の友のキリストでなく、人間の爲のキリストであつた。この世は奸惡である故、救はれ難しと主張するのではなかつた。もし、パン種がパンを醗酵せしむるならば、パンが亦醗酵すべき可能性を有つてゐる故に、このことが生ずるものと見ねばならぬ。常に奸惡なる目的を有ち、非兄弟的理想の支配下にあつて騷擾を極めてゐる男女の群より、崇高にして協愛的理想を有つ團體が構成せらるゝのであつた。彼らは同じ人間であつたが、變質せられたのである。彼らは最早相互に敵人でなく、兄弟であつた。各己の事柄のみを顧慮せず、援助の精神をもつて他の人の事柄にも注意を拂ふのであつた。

類推をもつてこの過程を説明すれば、有機的と謂ふべきである。神の國は累加に依つてその發達を遂げるのでない。神の國は自らを現はす環境より獲得したる新材料を同化して、發達して行くのである。イエスがその國の未來の進歩を敍するに至つて屢

生物學的類推を思ひ浮べたのを見るは我らの意外とするところである。ある人は、パン種の生物學的内容がイエスの心に判然と存在し難き故、この點にパン種の意義ある表象を確實に回想し難いのである。併し、観察し能ふ有機的發達の範圍に於て、イエスは植物の生命中に彼が漸く開始したもの、發達に類似せる有様を繰り返し認めたのであつた。また、神の國の發達は芥種のその如きものである（マタイ傳十三ノ三一）。種類によつて收穫の分量を異にする多種の地層に播かれた種子の成長（マルコ傳四ノ三）にも似てゐるのである。また神の國の發達は、種子が一度播かれると、地が強ひる故に是非とも成長せねばならぬ有様に擬へられてある。これは最も教訓にとむ類推である（マタイ傳四ノ二七）。稍々異つた見地より觀て、この世に於ける神の國の歴史は、收穫の時まで毒麥と麥とならば成長する畑の如く見えただであつた（マタイ傳十三ノ二四―三〇）。譬喩中、最も美しくかつ暗示に富むもの即ち新しき家族の者の能率は、恰も葡萄の樹とその枝の如くイエスと家族の者との合一の親密の程度に據ると判然と教へられたので

あつた（ヨハネ傳十五ノ四）。かくの如き思索的習慣は偶發的のものであつたと斷言するのは困難である。永久に亘る社會的發達の背後に何よりも先づ活動中の有機體に依つて環境の各部分の了解と同化のみに比せらるべき目的に同情する心と能力の單一化とが存在せねばならぬといふ眞理をイエスは高調せんと思はなかつた、と説明する。併しこの説明を是認するには家族としての新しき國の概念が上記の眞理に餘りに緊密なのである。實際、一度、「此の世」に關するイエスの概念が明瞭になると、この類推が驚くべき程顯著なものとなるのである。新しく啓示された神の子たることと人の兄弟性との經驗より生ずる力に滿された僅に數名の者の王國は、反對の諸力に充ちながらもなほ回心し得べき素質を有つ人々より成立する社會的環境裡に建設されたやうに看做されるのである。小さき團體は、この環境より能ふ限りの人を選択し、回心せしめ、かつ同化せるのである。また能ふ限りの制度にも同様のことを行ふのである。小さき團體はこれらの新しく獲得した要素を用ひて發達を遂げ更に發達する多くの可能性を

有つに至るのである。この有様は恰も地中に培かはれた種子が播かれた環境によつて育てられて行くに等しいのである。

併し、ある一點に於て類推は利かないのである。イエスは神の國がその窮極にては此の世に在る一種の國であると思惟してゐなかつた。植物はそれが成長する土地を全然それ自らのもの、また同一のものとなしえない。併し、社會の場合にはかくの如き二元論は許容されないのである。神の國を現在のものとして考慮する修飾の伴ふ場合、イエスは新社會が結局全社會と竝立して行くべきものと豫期した。更に的確に言へば、此の世が遂に神の國と判然對立することを止め、神の國の中に全く變質せらるゝのを豫期したのであつた。三斗の粉、悉く脹れいだすのである。此の君、既にさばかれたのである（ヨハネ傳十六ノ十一）。十二使徒は新しきイスラエルの審判官としてその座位に座し（マタイ傳十九ノ二八）、人の子も亦遂に至純なる審判者の榮光の中に降臨するのであつた（マタイ傳十六ノ二七、十九ノ二八、二十五ノ三一）。

併し、同化の過程は明かに道德的變質に伴はねばならぬ。惡しき者は新しき社會の歡喜に入るを許されない。イエスは人間生活の状態を改善するのみでは満足しない。現代既に判然過ぎる程明白になつてゐる如く、物質の皮相的征服、自然的物資の開発などは必然的に文化の本質的進化を意味するものでない。溫衣、飽食、大厦高樓の建築、大なる實業の興樹、全民族の富有を目的とする土地及び鑛山の開拓と採掘、これらのことは個人あるひは國民を協愛生活に入らしむるに最も疎隔せるものとなるやも計り難い。イエスの警告はこれら凡てに臨むのである。彼は言ふ『愚なる者よ、今宵なんちの靈魂とらるべし』（ルカ傳十二ノ二〇）と。併し、個人または一國民の建設的諸力を至高目的に従屬せしめること、惡は憎むべきもの、善は親しむべきものとする、利己的利益を追及せず、周圍の人々の社會中に自己の生命を作爲を用ひず失喪し、反つて自己の生命を見出す程に人を變質し、改善し、かつ高貴の者とすること、人は皆神の子なれば、人々の爲に愛の心を涵養すること、約言すれば、常軌の社會生活をし

て善に據らしむること、これこそ實にイエスの根本的立脚點なのである。この點に於て、彼は斷じて世の所謂自稱改革者らと同列に立つ者でない。これは今更注意を促すまでもなきことである。多くの賃銀を與へ、より慰藉にとみ、より幸福なる家庭を作り、都市の衛生状態を完全になし、潤澤なる収入の道を拓き、滋養に富む食物、善良なる娛樂、その他現代の價値ある生命の諸要求に備ふ、これらのことを爲し、その他は進歩に委ねるのである。これこそ實に一個の社會指導者以上の立脚點を暗示するのである。

併し、イエスの判斷に據れば、矯正される必要ある不完全は生命の誕生、領有の機會でなかつた。パリサイ人は遊女と取税人にも劣らぬ程惡しき者であつた。不平等と協愛性の缺乏の原因は道德的のもので即ち罪惡である。利己的精神が支配する限り、協愛が自然に流露する聖なる子性に到達し難い。惡しき樹はよき果を結ぶこと能はない(マタイ傳七ノ一七)。此の世は悔改と道德的更新とに由つてのみ神の國となり得るのである。

ある。殊に道德的更新は、善と愛の神に反抗する精神を變へて子性の精神とするのである。

イエスの洞察は正確であつた。完き社會は不完全なる人々によつて成立しない。多數の人々が社會に對して懐く理想實現の障礙となるものは、理想自らの論理的矛盾でなく、理想を實行するに適しき人の發見、あるひはその養成の失敗に基因するのである。大理石を使用する家の設計に對して、手許にある唯一の材料は泥土であつた。イエスは高尚なる設計と善き材料の供給を提案するのである。

罪深けれど蓋然的に氣高き性質を備ふる人類の道德的變質は漸進的である。それは到底一代に完成せらるべきものでない。恩恵を施す熱情溢れながら忍耐なき者はこの必然の理を見る明敏に乏しく失敗を重ねたであらう。イエスはその公生涯の初頭に於て此の世の征服を急がんとする誘惑と苦闘した(マタイ傳四ノ八一—一〇)。併し、彼はその傳道生活の末期に佇立して背後に遣せし眞摯なる努力の歳月を回顧し、而して未來を豫

斷せし時、彼には神の國の進歩は社會的大異變に依つて完成せらるゝものでなく、寧ろ、微小なる種子が徐々に成長發達し、遂に巨木となるに類似するやうに見えた（マテイ傳十二ノ三一―三三）。

未だ更新せざる社會を同化せんと企てる協愛團の漸進的發達の徑路に關し、イエスがその國の完成に達する過程に就て懷いてゐた概念を發見するやう特に心を用ひねばならぬ。

(三)

この過程は制度的と國民的であるべきか。あるひは個人的であるべきか。社會と個人の孰れが最初に更新するのであるか。基督教は個人主義を世に紹介したといふ説は屢々聞く一思想である。個人主義が孤立主義を意味しないならば、基督教こそ實に個人主義を主張したのである。何んとなれば、基督教社會觀は權利のみを頑強に要求し、

嫌惡の情を起さす個人の聚團の謂でない。基督教が個人主義的なりと主張し得る唯一の意義は、各人の生命價值の高騰といふ點に在る。併し生命の眞價値は孤立的存在に於てはなく、反つてイエスの理想と實行とであつた協愛の實踐に於て個人の利益と他の人々のそれとを同一視する點に存するのである。

とはいへ、社會は個人に由つて構成せられねばならぬ。故に、イエスは自身を主として個人に捧げたのであつた。改革は群集的にその方針を進行さして行かない。より完全なる社會生活の核心ともなるべきものが發達するまで、個人より個人と連續的にその靈魂を獲得して行かねばならぬのである。それ故、イエスの神の國建設の方法は政治的、經濟的、あるひは宗教的不正を大規模に矯正せんとするのでなかつた。勿論彼はその必要を感じた場合、此の不正行爲を永續する人々に反抗して義憤を洩すに何の躊躇もしなかつたのであつた。

反つて、彼はある時はピリポ型の者、ある場合はペテロ型の者と各獨立せる靈魂を

連続的に救ふ方法を採つたのであつた。かくて遂に彼はより完全なる社會生活を始め、その善き音信を傳へる爲に彼自身の協愛的精神に滲透する少數の男女を見出すまで、また彼らを自身の者とするまで、此の連續的獲得法を持續したのであつた。ロヨラーはザビエー型の者を、ヨハネは疲勞せる野盜を常に撓まず持續的に追ひ求めた。けれど彼れらの努力さへイエスがその進退を共にするに至つた卑しき漁夫を追ひ求めてやまなかつた不撓と連續的精神に勝らなかつた。一度、かゝる兄弟性の精神が旺盛となるならば、その反對より生ずる諸の不徳の驚愕すべき群は自ら消え失せるであらう。人はこの精神を特殊の律法に具體化する必要を感ずるのである。併しこれは各時代と集團自らの爲にせらるべきことである。イエスは憲法を興へ、人は法令を作るのである。併し、ある點に於て、彼は社會生活の爲に特殊の指針を興へたともいはれる。神の國の者は争鬪の渦中に投ずるよりも寧ろ瞞著せらるゝをもつて勝れりとする。彼は右の頬をうたれると左を向け法律に訴へるよりも寧ろ上衣を脱ぎ、一里ゆけと強ひる者

と共に二里ゆくのである(マタイ傳五ノ三九―四一)。これよりも更に簡単な規則が世にあらうか。

これらの規則は眞に簡單に見えるが、イエスの教訓中、これらに勝りてその價值査定に困難を感せしむるものは稀である。トルストイと共にこれらの教訓の如字的解釋を基督教教理の核心また心髓と認むべきであらうか。あるひは、無造作に無關心の態度をもつて、これらを東洋流の誇張法の神祕幽深に閉ぢ込むべきであらうか。盲従さるべきものか、それとも省略さるべきものであるか。

これらの教訓の通觀を得る適當なる見地は、協愛の表現としてイエスが主張した和解に求められるのである。兄弟を害つた者は祭壇の前に神を禮拜する前に赦免を得べき筈である(マタイ傳五ノ二二―二四)。たゞにそれのみならず、害はれたる者はかくの如き提言を待たず、出來得べくば、その迫害者との和睦を彼自身より進みて行ふべきである。切言すれば、和睦は悔改を待つてはならぬのである(マタイ傳十八ノ一五)。これは弟

子らにもまた後の世にも至難なことであつた。彼らは赦免にはある程度の制限を必要と思つてゐた。蓋し、彼らは七度も赦すことは人性を蕩盡せしむると思惟してゐた(マタイ傳十八ノ二二)。イエスはこれに答へて、彼の判断に依ると傲慢を空しくすることが不和の原因を永續さすよりも遙に勝つてゐると教へた(マタイ傳十八ノ三二―三五)。普通の諫言と訴へとを聞き入れざる者が到底悔い改むる見込なしと明かになれば、更に大なる凄慘と争闘の危険を冒すよりも寧ろ全く彼と絶縁するに如くはないのである(マタイ傳十八ノ一五―一七)。その内に相争ふ家と國も存在し難いとすれば、況や家族にてなほ更のことである。

協愛團に於ける統一と兄弟性の障碍なき實行の好機會を命令的に要求する光に照して、イエスのより激烈なる他の多くの言をも了解せねばならぬ。それらは新しくもなく、核心的教訓でもない。併し、協愛の教訓が未だその感化の下に來ない人々にまで擴大して行く場合、この大なる教訓の新しき相となるのである。基督教社會の者の間に

兄弟としての統一がある如くに、彼らと友誼を結ばざる者との間にも如何なる犠牲を拂つても愛なく悪しき世の變質を可能ならしむるもの即ち平和の礎を固うすべきである。復讐の舊き掟はこゝでは絶対に不法視されてゐる(マタイ傳五ノ三八、三九)。迫害、壓迫、侮蔑——激烈なものでないとしても——などが、愛のなし遂げる和解を阻むに適當な論據を提出しえないのである。イエスは復讐と正義とを慾望する情の熾烈さを熟知してゐた。彼は亦絶えず権利のみを頑迷に主張する者、復讐の精神を懷いてその敵人を正義に向はしめやうと試みる人々に由つて此の世を征服することの至難、木に縁りて魚を求むと異ならぬを熟知してゐた。これは實に嚴しき教訓であつた。れど、彼の見地より言へば、避け難きことであつた。この世と戦つて愛の勝利を獲得しやうと企てるよりも寧ろ惡に苦しむ方遙に優れることであらう。赦免は自然的發露であらねばならぬ。また必要ならば、被害者は和解への道を拓く者であらねばならぬ。

上記の理由によつて、イエスは悪しき者の狂暴な急撃に備へる障壁を撤廢したか。彼は迫り來る危害より自らを防禦せざる底の人、罪人を處罰せざる底の人を望んだのであらうか。また彼は詐欺師、野盜、その他あらゆる種類の無頼漢が、罪人の階級より自らを清淨にせんと決して努めない社會に害毒を流すのを拱手傍觀するであらうか。豚の前に眞珠を投げる勿れとの注意(マタイ傳七ノ六)、迫り來る危険より回避する注意深き好例(ヨハネ傳七ノ一)、またイエスが偽善者と竊取者らに加へた論責(マタイ傳二十三ノ二七、二八、ルカ傳二十ノ四五、四七)などが無いとしても、疑問は自ら氷解するであらう。イエスのいふ善は常識を離れてゐない。争鬭を慎しみ、個人的敵人に對して課せらるべき正當なる懲罰をさへ差し控へるを悦ぶ意味の無抵抗主義は、正しき處罰に由つて社會がその住民を改悛せしめねばならぬ試みと同一視すべきものでない。麥は束ねて倉に納れると全く同じに、毒麥をあつめて焚くのであつた(マタイ傳十三ノ三〇)。併し、ある意味に於て、個人はかゝる自治的處罰——イエスは寧ろ神聖なる處罰といふであ

らう——に少しも關はるべきでないのである。彼の義務は單純である。即ち沒我的愛をもつてその隣人を彼自身のより高き理想とキリストの模倣とに導き入れることである。従つて改悛を目的として課する刑罰の必要さへ徐々になくなり、兄弟性の新しき意識に由つて供給された新しき動機の故に凡ての人々は社會奉仕が愈々益々自然的に深くなる生活を擴大するに至るのである。

それにも拘らず、人口に膾炙されてゐる如く、善人必しも善き社會を作るものにあらず、と反對論が唱へられてゐる。時にこれは眞理なのである。有徳の士を埋木とし、自己中心的でなくも、周圍の人々を援助して進撃的行動を執るには尠くとも不適當な者とする方法でもつて徳を涵養することもあり得るのである。もしこれが基督教的教訓の合理的結果であるならば、基督教社會にも全く失望を禁じ得ないであらう。イエスの生涯を指示することが、この反對論に與ふる適當な答である。我らは彼にその教訓の全き受肉を認めるのである。何人も基督者が構成する社會は完全なる協愛團なり

といふ實感なしに彼の生涯を研究し得ないのである。また誰れもソクラテスの徒に關してこれと同じ感じを有たないのである。彼とその性格を同うする千名の者は、生活するに極めて不愉快な社會を組織するであらう。これと同じことが、禁慾主義者あるひは準禁慾主義者の改革者らが構成する社會に就ても亦眞理である。イエスの生涯は彼が實に常軌に適したる生活をなし、他の人々の幸福安寧の爲に思慮深く献身し、經驗が生む社會生活の整理者としての諸習慣に慎重な注意を拂ふたことを證明してゐる。従つて、イエスが他の人々の生活と彼自身の生活とを同一視する點に最も完全なる使命を見出した者の代表者であることも明白である。實際、個人としてイエスの生活に模倣する程度に嚴密に比例して、人はイエスの協愛的社會の建設に一臂の力を盡すことになるのである。

(四)

それ故、膨脹しつゝある基督教社會は、主が教へた同じ精神と生活方法とを體得せる男女の群に由つて成立するのである。イエスはかくの如き個人の小さき群をパン種に譬へた。このパン種はパン粉に混せられ、パン粉を膨ますまではその中にどゞまるのであつた。この小さき群はこの世の者でないが、なほ、その中に在留するのである(ヨハネ傳十七ノ一五)。彼らの座右の銘は退却でなく、征服である。この世に於ける基督教社會の進歩は、社會に聚つた基督教的人格者の各核心がその環境の社會生活に及ぼす力に據るのであらう。その環境を變質せしめ、かつ同化せしめること、それのみによつて基督教社會は膨脹してゆくのである。進歩は單なる制度の進歩の謂でなく、新しき生命の移入である。イエスは此の移入を完成せしむる方法を胸中に秘めてゐたに相違ない。我らが豫期する方法とは、人々を基督に肖る者とし、従つて協愛的たらしむる諸力の感化の下に誘導することを極めて容易とするものである。イエスは何かこれに類似せる方法を特に指示するであらうか、あるひは暗示するのであるか。

イエスは生活のより大なる範圍に於て環境を變革するに輿論の力を間接に認めたりやうに見える。社會の基督教化のある點は無意識の裡に行はれるのである。これは認容せられねばならぬ。この國の純真なる者の生命は、信仰告白者以外にも感化力を有つのである。この感化は測り難く、かつ現實的である。蓋し、この純真なる者らはその社會の成形力なる理想と輿論とに對してある種のものを買献するからである。イエスの感化を受けた者の感化に依つて、他の者らは尠くとも保守的道德のより高き標準を用ひるやう絶えず強ひられるのである。とはいへ、イエスの輿論觀によると、輿論の力は最初の瞥見では概して罪惡の如く見えるものである。彼の弟子らはパリサイ人のパン種と相違してゐるのであつた(マタイ傳十六ノ一、マルコ傳八ノ一五)。彼らは偽善者の習慣を模倣する者でなかつた(マタイ傳六ノ二、五、一六)。パウロの表現を用ひると、彼らは『この世に倣ふ』者でなかつた(ロマ書十二ノ二)。併し、偽善者が眞摯なる者にその位置を譲れば、俗惡なる輿論は直に新しく、より善良なる輿論とその位置を顛倒するの

已むを得ざるに至るのである。この事實を認むるのは決して困難でない。もし、誰れか惡しき社會的標準に一致しないならば、新しきものを選択することは慥に彼にかゝつて來る責任である。茲に、現代社會の貧困者の爲にその救濟を企てる場合、イエスの感化は痛感せられねばならぬのである。彼は貧窮者の恩惠となる爲に奇蹟を常に行ふべき者と豫期されてはならぬ。彼の更生力は、彼の教訓に従ひ、彼の原則を法律と産業生活とに顯彰せんと試みる者の良心と同情とに潜在せねばならぬ。現今の悲觀説がただ貪慾と鐵則のみを見る場合に、樂天的詩篇の詩人は、貧困者を顧る聖なる配慮を認識したのであつた。イエスが建設せんと希望した純眞の協愛團を表現せねばならぬ輿論は、經濟原則と不調和のものでなく、また父の愛の眞の表現は兄弟の援助となるものである。

原始基督者が神の國の建設の爲に企てた最初の試は彼らの主のそれらの如く、博愛的努力に關つてゐた。ペテロとヨハネとは施濟の代りに跛者を癒した(使徒行傳三ノ一)。

基督者の小き群の中に見らるゝ新社會精神の最初の表現の一は兄弟間に於ける富の分配であつた(使徒行傳二ノ四四)。仁慈を介して基督教社會と最大奉仕の對照であるこの世との間に恒に接觸がある。仁慈は、神の國が實現せらるゝならば、必ずしも此の世にとつて永遠に必要なないのである。併し、現代の如き社會組織の下にある生活に於て、イエスは仁慈の最も重要な意義を認めたのであつた。イエスは熟慮と強固なる態度を用ひて富豪の社會的義務を詳細に亘つて決定した。彼らは、貧窮者の爲にその食卓を備へ、社會奉仕に相當する報酬を豫期出來すとも、なほ貧窮者を彼らと平等の者として應接せねばならぬのである(ルカ傳十四ノ一三)。田地と牛を購入した者、新婚の夫も社會奉仕をすべきであるが、彼ら自身の冷情無關心の故に、王の饗宴に於ては大路小路に佇む者にその席を譲らねばならぬ部類の者とイエスは認めるのである(マタイ傳二十二ノ一〇、ルカ傳十四ノ十六―二四)。富が社會的目的の爲に奉獻せらるゝならば、優越感をもつてせず、また附與者の同情と愛をもつてせねばならぬ。貧しき寡婦は僅にレブタ

二つを投入しても富める者よりも多く献金したのであつた(マルコ傳十二ノ四一―四四)。善きサマリヤ人の親切は、彼が消費した金銭の額よりも、不幸なる旅客に現はした奉仕中により多く認めらるゝのであつた。これは慥かなことである(マルコ傳十ノ三〇以下)。後に、パウロがこのことを洵に美しく言ひ現はして、たとひ、誰れか貧しき者にその所有の全部を與へたとしても、もし彼に愛がなかつたならば、その行爲は彼に何の益をも齎さない、と教へた(コリント前者十三ノ三一)。人の眞の希望は、他の人々に影響を與ふる行爲の標準となることである(マタイ傳七ノ一二)。それ故、施濟に屢々言及してゐるのは、協愛の支配を擴大する方法として用ひらるべしといふ外、他に何らの意味がないのである。施濟はそれ自らに目的があるのではなく、多くの他の善き行爲と同様、天に在す父に榮光を歸する者を起さんが爲である(マタイ傳五ノ十六)。それに依つて人の注意と善き意志とが集中せられ、新しき社會組織の基礎即ち兄弟の愛が更に多く顯現し、かくて、天の父とその子イエス・キリストとに靈交を結んだ古き基督者との合一

を多くの者に齎すのであつた(ヨハネ第壹書一ノ三三)。

併し、多分、最も効果ある點から言つても、また歴史的な點から言つても、今日に至るまで社會更新に活動してゐる唯一にして承認せらるゝ價值ある力は教會である。此の團體に就てある人の懐く概念に據れば教會は神の國と並行すべきもの、あるひは、神の國よりも範圍の狹隘なものと見做されてゐるのである。併しながら、イエスのことのみを思考すれば、彼は宗教的制度を設けることに少しも考慮してゐなかつたと見ることが合理的に明白になるのである。彼が教會に就て話した二個の例中、その一を見れば、教會が兄弟性持續の一助であることが明瞭なのである(マタイ傳十八ノ一七。『縛き、解く』といふ形式——權威をもつて教ふる權利——は教會に委屬せられたのでなくして、教會が建設せらるべき神の國の民に委屬せられたのであつた(マタイ傳十六ノ一八)。イエスの思惟せる教會は、神の國の生活上の宗教的相に外ならないかのやうに見える。神の國は本質的に社會的であつたと一般、國家はその政治的方面に於ける新

しき協愛團に外ならぬのである。それと同じ意味にて、教會は特に協愛團にして宗教的努力を目的とした協愛團の會員の團結を表現するのである。イエスは教會の組織に就て一言も言及せず、實際に儀式の如きものに就て何らの指針をも遺さなかつた程、制度としての教會には無關心であつた。彼は神の國を建設したが決して教會は設立しなかつたのである。けれど、社會の現状より觀て、イエスの教訓を生活化せんと努力する人々とその努力を拂はざる者との間に主要なる接觸點となるものは、教會として知られてゐる組織體である。これは少しも疑ふべき餘地ないのである。各教會がイエスを了解すること深くなる程度と完全なる個人的生命の社會的に必須缺くべからざることとを強調せんとする努力とに比例して、教會がその環境を變質する時、教會の感化は感得せらるゝのである。

更に、基督教的に社會を變質せしむる經過は、イエスの方法に於けると全く同一にて、同心、よりの確に言へば、個人の更新と並行せねばならぬ。これまた自明のこと

である。この點に於て、より大なる基督教的社會を創設せんと努める者は、教會の努力の比類なく貴重なる援助を享けるのである。數十年間、福音的信仰を奉ずるあらゆる種類の教會は進歩的社會更新の基礎を深く据ゑんと努力して來たのである。これまで、かゝる綱領はその効果尠きやうに見える場合に屢達著したのである。往々、人は神への個人的信仰の顯勢力の代りに倫理學説を用ひる努力を重ねた。併し、かゝる努力は一般的に保守的道念を脆弱し、また全體として社會の墮落を齎すに至る結果を生じた。あるひは時に保守的道念の脆弱と、社會墮落を先導するやうにもなつた。基督教社會道徳の試金石は、基督教社會の群集の宗教的熱情と同様、その倫理的指導者の言説でなかつた。十七世紀の英國より分離派と清教徒の熾烈なる熱情を除けば、王政復古と宮廷牧師が残るのみである。信仰復興と傳道所の補足として音樂會と幼稚園は緊要である。併し、國民の文化と純真との救主としては暴風の前の草花に過ぎないのである。思慮深き人は、この數年間に社會的授産事業と會館的教會内に燃え上つた職業的と醉狂的

博愛主義の顯著な聯結を蔑視し、反抗的氣分を擧げやうと努めない。併し現在判斷し得る範圍では、かゝる社會的努力の形式は——深奥な意味では基督教的であるやも知れないが——古くより繼承し來れるより永遠的なる宣敎使の働の必要を除外し能はないのである。宗教的經驗より生ずる正義と協愛とに凡ての人を導く努力を拂ふまでに到らない社會改造は徹底的でなく、かつ耐久力にも乏しいのである。夫故、教會の傳道的努力は、單に罪惡より正義へ轉身を試みた人に與へられた恩惠の理由に依るのみならず、社會的進歩の凡ての事件に伴ふ深遠なる意義と補力との理由に依つて論じらるべき性質のものである。キリストの概念に據る社會更新は、惡しき者と善き者と置換するより外に進展して行く道なし、と強調しても決して言ひ過ぎないのである。凡ての他のことに勝つてこれが教會の機能なのである。蓋し基督教的理想は修道僧のそれだけでなく、キリストの理想なのである。個人の更新を助けることは即ち社會の更新を助けることである。

(五)

イエスが豫告した完全なる家族に不完全なる社會を變質することはこの過程に従ふならば多くの時間を必要とする。これは明かなことである。イエスはこれを豫知したのであつた。神の國が直に来るものと豫期してゐた者に、イエスは遠國に旅行せし高貴の者の譬喩を話した(ルカ傳十九ノ一以下)。變質の過程の眞の究極は、世の終り——イエス自身さへ知らずと宣言した未定の時期の出來事——までは到達しないのである。それはたゞ緩漫であるのみならず、人道と人間社會とを改善せんと試みた人々にとつては、奮闘と苦惱とに盈滿せるものであつた。實際、イエスが彼自身の經驗によつてその弟子らの受けねばならぬ苦き反抗を了解しなかつたとすれば、彼は驚くべき程先見の明に乏しき者と謂はるべきであらう。主はベルゼブルと呼ばれて迫害を受けた。彼の弟子らはこれに類似せる冷遇を免れることに於て、その師よりも勝れりと豫期する

であらうか。その師のごとくなれば弟子らは満足であつた(マタイ傳十ノ二四、二五)。新しき教理は如何に有益であつたとしても、イエスはこの教理の主張する平等と協愛とが疎隔した人々によつてこれが革命的なりと徹底的に批難せらるゝのを熟知してゐた。彼の使命は全然平和のそれではなかつた(マタイ傳十ノ三四)。彼は社會生活に劍と火とを齎す爲に来つた(ルカ傳十二ノ四九)。新しき宣傳に携はる者は、ローマ人とユダヤ人とより峻烈なる待遇を豫期すべきであつた。彼らは豺狼のなかに入る羊の如き者であつた(マタイ傳十ノ十六)。政治的勢力と教權主義は共同して彼らに反抗の氣鋒を示した(マタイ傳十ノ一七、二十三ノ三四、ルカ傳十二ノ一六)併し、茲には些の妥協もあるべきでなかつた。救はれんと願ふ者は終りまで耐へ忍ばねばならぬ(マタイ傳十ノ二二)。聽いた者はそれを屋の上にて宣べ傳ふ者であつた。彼らは山の上にある町であり、燈臺の上におかれた燈火、その効力を失はざる鹽であつた(マタイ傳五ノ二一—二五)顯はるゝ爲めでなくば、隱るゝものはないのであつた(マルコ傳ノ二二、ルカ傳八ノ一七)。同時に、神の國の民は復讐心に囚

はれず、革命を起さないものであつた。反つて、彼らの目的は、祈禱と祝福とであつた（ルカ傳六ノ三八）。イエスが成功の爲に依倚した諸の力は平和的のものであつた如く、彼の弟子らの關はれる範圍にては、好意を有ざる世が神の國に變質せらるべき過程も亦平和的のものであつた。

併し、彼が緩漫にて悲痛な進歩を平靜に豫想する裡に驚愕に價することがある。それは、人間的のもろ／＼の力が不充分となるべき時、また環境に見出す變質せらるゝ材料全部を變質し、かつそれを同化した故に、新しき社會組織が建設せらるゝ時、その時の可能性を認識した點とである。その時の來るまでは、相反抗する二つの世界が必然に竝立せねばならなかつた（マタイ傳十三ノ二四—三〇）。毒麥と麥が同じ畑に成長すると一般、善き者と惡しき者がその發達の可能性を竭盡するまで共存するのであつた。在天の父にて王にまします者の至高力の發揮に依つて、苦惱も變質も消えてあとかたもなくするのであつた。毒麥が麥と區別せらるゝと一般、新しき子性と協愛とを享け

ることを拒絶せし救済の見込なき者は他に移され、彼に代りて義人はその父の國に太陽の如く照り輝くのであつた（マタイ傳十三ノ四三）。

大異變によつて發達の補足の生ずる時期に就ては、イエスも何らの消息も洩してゐない。併し、彼がその必然なることを熟知してゐたと思はるゝのは、彼の現實感に對しても首肯せられる。絶えざる反逆子の性質と反協愛的性質の人々は、斷じて愛にとむ兄弟とせられないのである。彼らの他に移さるゝことは、恒久的平和の協愛團の唯一の希願である。イエスがこの思想を表はした顯著なる譬喩によつて何を意味したか、我らはそれを判然と了解し能はないのである。革命か、あるひは何か他の驚異すべき政治的激變か、それは判明しないが、エルサレムの陥落に言及せる言の光に照して絶對に否定さるべきことでもない。孰れにしてもそれは新社會組織の勝利を特示するのである。刑罰的行動は、妨害者を孤獨ならしめれば、その目的完成するのである。個人的と制度的生活は啓發せられたる利己心の支配にさへその價值も立證するに足りない

のである。此の世は、人の努力と神の更生力とに依つて神の國に變質せらるゝであらう。この新しく完くなれる人道、イエスが論述し、創設せし永遠の協愛團、數世紀も苦痛を嘗め來つた協愛團の勝利、これこそ實に主の降臨である。

「それ故、神の民の爲になほ安息は遺れり」(ヘブル書四ノ九)と。これは、常に安寧なく、戦敗の憂目を見た神政政治を追懐し、眞のユダヤ教の未來を眺望して、ヘブル書記者が記した言である。それと同じく、多くの人々が、受納しやうともせざる世にキリストの兄弟性と愛の祝福を齎さうとする努力も水泡に歸した。併し、なほ彼らはその生活する世の罪、悲惨、社會的不平等の暗黒を通つて大なる安息の黎明の輝き初むるを待ち詫びつゝ、東の空を打ち眺めてゐた。最早、我らは黄金の街衢、碧玉の壁繞る新しきエルサレムを豫期しない、我らは神が王にのみましました父にまします市衢、愛が公平に正義が歡喜にまで通ずる市衢を待ち望むのである。蓋し我らをイエスの言と生活とに遭遇さすものは、夢想でもなく、默示でなく、我らがその體驗を得んと努力するに

充分價值ある教訓である。現今、人道の要求を痛感し、此の世が把弄されてゐる危期を洞觀する者は、未だかつて何人も、あるひは如何なる教訓も齎し能はなかつた文化をその生活と言をもつて再現せし者が啓示した理想と力とを輕卒にも傍に見捨てないのである。

Printed in Japan

大正十五年五月廿二日印刷
大正十五年五月廿五日發行

(定價金一圓五十錢)

譯者 山本 彌一 郎

發行者 エス・エイチ・シエンライト
東京市赤坂區青山三十三

印刷者 波邊 吉 郎
東京市京橋區深田町五

印刷所 中心堂印刷部
東京市京橋區深田町五

東京青山南町七丁目一番地
教文館出版部
教文館、警醒社、基督教書類會社
下關福音書館、其他各書店

發行所
發賣所

不許
複製

533
180

イ
エ
ス
種
之
相
三
二
九

イ
エ
ス
研
究
九
五
五
二
八

終

